

## 中東についての個人的断片

吉田 真人

酒席で饒舌になる、歌い出す等いろいろな人がいるが、泣き出す人もいる。1980年頃、会社の酒席でイラン石油化学プロジェクト（IJPC）の話題になった時、後輩が泣きだした。彼はIJPC建設支援のため、現地に派遣されたひとりであった。曰く「革命までは現地スタッフとは極めて良い関係で、彼らは技術の習得にも熱心で先生、先生と慕って来た。ところが革命と共に態度を一変し『米帝の手先、反革命の輩』と論難され、石を投げられる勢いであった。この激しい落差にびっくりし、人間不信になった」との事。

ロンドン北方の街にあった語学学校に行ったのはもう40年も前になる。

様々な出身国の生徒中に、いつも4〜5人のグループで行動していたクウエート勢がいた。不遜な、ぶっきらぼうな態度をとり、かつ巻き舌の発音で極めて聞き取りにくい。聴いてみると、クウエート石油公社（KPC）から派遣されてきた、との由。丁度その一ヶ月ほど前に、上司のお供でKPCを訪問し、幹部のSU氏を表敬していたので、そのことを伝えると、あら不思議、極めて丁重な物腰となった。「次は何時SUと会うのか、その時には自分達は語学学校で真面目かつ熱心に勉学に励んでいた、と是非伝えて欲しい」と懇願される始末であった。

次の逸話を耳にしたのは、これも40年ほど前だ。

一匹のサンリが川を渡ろうとしていた。しかし、サンリは泳げない。そこにカエルが現れた。サンリはカエルに「向こう岸までおぶって運んでくれないか？」と頼んだ。カエルは「いやだね、お前は俺を刺すに決まっている」と拒絶したが、サンリは「君を刺したら俺は溺れて死んでしまう。そんなことするわけないだろう」と説得した。カエルは納得しサンリを背負って川を渡り始めた。ちょうど半ばに差し掛かったところ、カエルは突然背中に鋭い痛みを感じた。「どうして刺した、お前も溺れて死ぬんだぞ」。サンリは言った「わかってはいるが、やめられない、これが中東だ」。

(2023年12月14日)